

[Knowl. 14, 48 (1891)]	S. W. Burnham 氏,	週期 450年,
[A. N. 132, 1 (1892)]	Si. v. Glasenapp, 氏,	,, 166.24,
[P. A. 25, 668 (1917)]	H. N. Russell, 氏,	,, 215.

今般, Yerkes 天文臺で, Van Biesbroeck 教授指導の下に, R. N. Van Arnam 氏が, 1930年までの観測結果を利用して, Zwier 法 [A. N. 139(1896)] により, 下の如き軌道を算出した. [A. J. 1000]

$\mu = 1.^{\circ}309$ (逆行)	A = $-0.^{\circ}6284$
P = 275年	B = 0.0215
T = 1889.8	F = -0.3045
a = $0.^{\circ}715$	G = 0.2860
i = $\pm 70.^{\circ}2$	
e = 0.57	
$\Omega = 166.^{\circ}8$	
$\omega = 329.^{\circ}6$	

視差を $+0.^{\circ}007$ (Sproul 天文臺の測定) とすれば, 此の連星系の質量は, 吾が太陽の 12.5 倍となる.

花 山 だ よ り

去る十二月13日, 花山天文臺は葛城伯爵御夫妻を御迎へするの光榮に浴した. 丁度此の日は正午に大學工學部に火災が起り取り込んでゐたが, 事務室の松村氏も來られ, 午後1時半頃山本教授御夫妻以下臺員一同奉迎裡に伯爵御夫妻は細川候, 狩野名譽教授と共に御着きになり, 4時頃まで, 山本教授の御案内で構内を御一巡遊ばされた. 今年は六月17日に大谷光暢師御夫妻, 十月28日に久邇宮若殿下, 本日伯爵御夫妻と, 都合三度光榮に浴した次第である. 尙ほ十二月8日には賀川豊彦氏が參觀に來られた. 同15日には新城名譽教授が歸朝され, 翌16日には國際經度觀測が終了し, 20日には金星の掩蔽が觀測された. 此の日は山本教授は倉敷で觀測されたが, 花山には田邊名譽教授が來られて大ドーム室で, 臺員と共に觀測された.

十一月30日から始まつてゐた構内電柱様模替へ工事は十二月5日を以て終つた. 此れに依つて今迄本館西側にあつた變壓器は宿舍西側に移され, 電線も西側の松林にかくれて廣々とした感じとなつた. 此の工事に續いて, 十二月7日より構内弱電流送電線も模様替へ工事を起し, 今迄三角塔を電柱代りに使用してゐたのを止めて, テニスコート西側の電柱に依つて, 本館子午線館其他と連絡する事になつた. 此の工事は10日に終了した. 更に十二月19日には三角塔を取りこはし, 同22日には花山道路に標柱や自動車への注意標等各所に立てられて, 天文臺の面目が一新された感じとなつた. (星見山人)